



No. 7

2000 - 11 - 25

日本蜘蛛学会



トピックス 日本蜘蛛学会第 32 回 大会（東京都）が 開催された

第 32 回日本蜘蛛学会大会の印象など

第 32 回蜘蛛学会大会は、2000 年 8 月、まだ暑さの残る東京大学において開催された。今年の大会の特徴は、研究材料としてのクモの面白さを前面に出した 2 つのシンポジウム（「クモの採餌戦略の可塑性」および「食物網のなかのクモ」）の開催にあるだろう。ここではシンポジウムを中心に大会についての印象を記してみたい。

シンポジウム「クモの採餌戦略の可塑性」では、まず渡部健氏が餌条件に対応してクモが採餌方法や網の構造を変えることをカタハリウズグモで示した。ひきつづき中田兼介氏はゴミグモを材料に、クモがいかにして現在の営巣場所の価値を評価し、移動する・しないを決めているのかを、野外観察とモデルによるシミュレーションから解析した。いずれも、ただ漠然とクモをみるのではなく、観察や実験が理論的な考察とうまく結びつけられていた。このあたり研究の進め方などずいぶん勉強になったように思う。

もうひとつのシンポジウム「食物網のなかのクモ」では、まず加藤千佳氏が「巨大ビニールハウスを設置して河川から羽化してくる昆虫を

遮断する」というこれまでにはなかった大規模な野外操作実験により、河川からの羽化昆虫が餌資源として流域に生息するクモ類の群集構造におよぼす影響を明らかにする試みを紹介した。島崎彩氏は、シカの採食による下層植生の改変が、クモと餌昆虫の関係にどのように影響するのかを報告した。このなかで、演者は網にかかった獲物の解析を通して、クモの餌としての土壌由来の昆虫（土中から羽化してくる昆虫、主に腐食連鎖のメンバー）の重要性を指摘した。遠藤知二氏は、クモ狩りバチ（ベッコウバチ）が固定した営巣場所をもつこと、獲物となるクモの探索は巣の周辺でしか行なわれないことに着目し、狩りによる特定地域でのクモ密度の低下が、他の生物、たとえば普段はクモの餌となっている飛翔性昆虫等、におよぼす影響を解析した。

いずれの研究も目のつけどころがいい。解決すべき問題、解こうとしている問題がはっきりしている。また、謎解きの過程に論理がある。聞いていて、「なるほど！」とうなずくことが多かった。例えば、クモの餌となる虫の問題。クモの獲物についてはこれまでもたくさんの報告がある。しかし、餌となる虫が食物連鎖のどの系に由来するのかを考慮した研究は最近までほとんどなかったのではないかと。じつは筆者も学部学生だった頃（1980 年代）、オオヒメグモなど数種のクモの餌を数千例ほど集めたことがある。しかし、データの解析にあたって、この

ような視点ももちあわせていなかった．考えも
しなかった！ 惜しいことをした．

80年代以降，生態学の国際誌にクモを材料に
した論文が次々と掲載されている．このことか
らわかるように，行動生態学や群集生態学の
材料としてのクモの面白さは，いまや世界の多
くの研究者に認知されているのだ．そういう意
味で，「いまクモの何が面白いのか？」「何が重
要な問題なのか？」を会員にひろく紹介する場
として，また会員
が勉強する場と
して，今回のシン
ポジウムのような企画はぜひ今後
の大会においても設けて欲しい．

それぞれシン
ポジウムに先だ
って宮下直 榊元
敏也両氏による

解説がなされた．いずれもわかりやすく，よく
まとまっていた．その後の講演の理解も深まっ
たように思う．

さて，シンポジウムに対する苦言をひとつだ
け．司会の宮下氏もおっしゃっていたように，
シンポジウムというのは聞くだけでなく，そこ
からでてきたものを肴に「あーだ，こーだ」と
議論することが本当は楽しいものなのだが（質
疑応答をするあるいは聞いているうちに理解が
深まったり，新しいアイデアを思いつくことが
しばしばある！），残念ながらこれまでの大会と
同様，質疑応答が必ずしも活発とはいえなかつ
た．これは演者や司会の問題というよりは，聴
衆からの質問の少なさ，いいかえると参加の少
なさに起因しているようにみえる．（講演の内

容からしても）もうすこし活発に質問がでて
よさそうに思うのだが……みんなシャイ（？）
なのかなあ．

質疑応答の活性化にむけては，いろいろな策
があるとは思うが，最近いろいろな公開講演会
で採用されている手法が参考になるかもしれな
い．それは，会場の参加者（聴衆）に質問紙を
配り，休憩時間にそれらを回収し，総合討論の
際に司会者がそれらを適宜読みあげ，パネリス

トが答える，と
いうものである．
これなら，シャ
イな人でも質問
できる（私が勤
務する大学でも
講義の最後に学
生に「何か質問
は？」と問うて
もまず反応はな
い．しかし，質
問紙を配ると多



ポスター発表の一コマ

くの質問・疑問・感想がかえってくる！）．司会
者が会場からの質問をもとに議論の流れをある
程度つくることもできる．どうです．一考に値
しませんか？

一般講演は，口頭発表が13題，ポスターが8
題であった．個人的には，母グモによる子（卵）
の保護に関する研究が面白かった．クモはこの
方面の研究には適当な材料のようだ．特に母グ
モの除去実験がいい．結果が明白だ．例えば二
見恭子氏によるアマギエビスグモの研究．卵の
うを守っていた母グモを除去すると，何者かによ
って卵が捕食され，卵の死亡率は飛躍的に高
まるという．母グモによる保護というのは思っ
たより効果があるらしい．それにしても，いつ
たい誰が（危険をかえりみず）クモの卵を食べ

に来るのだろう。他のクモ？ もしそうならとても面白いが……今後の野外観察によってぜひ犯人を明らかにして欲しい。

大会に先立ち、国立科学博物館で公開講演会「クモ類の多様性と進化」が催された。これもふくめると今年の大会の会期は事実上4日間であったといえるだろう。この4日間を通して参加者は、かなり多くのものを得たのではなからうか。準備にあたった関係者の皆さん、御苦労様でした。次回、33回大会は、2001年8月、沖縄で開催されます。（田中一裕）



インフォメーション 小動物の保護に関する 研究助成金

2000年4月上旬に蜘蛛学会宛に、財団法人・自然環境研究センターから、研究助成金の募集について資料が送られて来ました。この時は庶務幹事を引き継いだばかりであり、会員への迅速な連絡方法が思い浮かばなかったため、「クモネット」MLを借りて募集概要をお知らせしました。しかし、クモネットに入会していない、あるいは電子メールを使っていない会員も多いと思い、ここに募集の概要を記しておきます。これは2000年度の資料ですが、次年度も同様の募集が行われると思います。応募しようという方や詳しい内容を知りたい方は、私宛にご連絡ください。来年度の資料が届きましたらコピーを郵送いたします。

連絡先：〒305-8604 つくば市観音台3-1-1
農業環境技術研究所 個体群動態研究室
田中 幸一
Tel: 0298-38-8313(直通)
Fax: 0298-38-8307(直通)
E-mail: tanaka@niaes.affrc.go.jp

以下は募集概要です。

名称：公益信託 増進会自然環境保全研究活動助成基金

対象：絶滅のおそれのある小動物（環境庁のレッドリストに掲載されているもののうち、大型のほ乳類・鳥類を除く動物）の保護・増殖に関する調査・研究で、次の2つが対象。

A) 絶滅のおそれのある小動物の保護・増殖に関する調査・研究

B) 絶滅のおそれのある小動物の保護に係る生息環境保全および環境復元・回復に関する調査・研究

次の2条件を満たすこと

- (1)具体的に着手の段階にある研究
- (2)営利を目的としない研究

応募資格：

- (1)小・中・高等学校の教員
- (2)大学および研究機関に所属する者
- (3)その他研究機関等に所属する者
- (4)学会等から推薦を受けた者

助成金：1件50万円。採用はA、B合わせて5件以内。

報告義務：助成期間(原則として1年)終了後、研究の経過、結果、会計を報告する。

応募締切：2000年5月31日

参考：クモでは、1995年度に「ミズグモの生活史と生息環境に関する研究(代表:吉田真氏)」が採用されている。

なお、応募資格がない方が応募する場合について、評議員会で検討され、次のことが了承されました。(1)基本的には応募資格のある人に代表者になってもらう、(2)どうしても代表者がいない時には学会推薦とする(評議員会の承認を得る)、(3)学会推薦について複数の依頼があった場合、それぞれを学会として推薦する。

(田中幸一)

動物分類学関連学会連合からの フォーラムのご案内

動物分類学関連学会連合では、2001年1月13-14日に、他の5団体または機関と共催で下記の合同フォーラムをおこないます（講演者の一部の演題が未定です）。関心のおありの方はふるってご参加下さい。

Joint Forum: Taxonomy Initiatives for Biodiversity Conservation in an IT era

『IT時代における生物多様性保全にむけての分類学振興』

共催機関

The Union of Japanese Society for Systematic Zoology

ICSU/CODATA (Survey of Data Sources in Asian Oceanic Countries)

National Science Museum, Japan

Gaialist 21st

Species 2000 Asia Oceania

National Institute for Environmental Studies

場所：国立科学博物館分館（東京都新宿区百人町3-23-1）ホールと会議室

入場料：無料

DAY 1 January 13th 2001

Session 1

Case Study in Fishes towards Global Scale Data Integration

Chair: Keiichi Matsuura/John R. Paxton

9:00-9:20 Rainer Froese

9:20-9:40 Peter Ng "The state of freshwater fish taxonomy in Southeast Asia"

9:40-10:00 John R. Paxton

10:00-10:20 Kwang-Tsao Shao

10:20-10:40 Keiichi Matsuura and Hiroshi

Senou "Fish database in Japan with special reference to fish-image database and its role in biodiversity study"

Coffee Break 10:40-11:00

Session 2

Biodiversity Information Activities in Japan

Chair: Hideyuki Shimizu

11:00-11:20 Motomi Ito "Flora Japonica"

11:20-11:40 Tadasu K. Yamada "Marine Mammal Stranding Database and its Future"

11:40-12:00 Junko Shimura "Bacteriology Insight Orienting System"

Lunch 12:00-13:30

Session 3

Expectation on Biodiversity Informatics

Chair Junko Shimura

13:30-13:50 Takashi Kunisawa "Plastid Phylogeny Inferred from Gene Order"

13:50-14:10 Kohichi Goka "Alien species"

14:10-14:30 Dennis Gordon

14:30-14:50 Hiroshi Tobe

Coffee break 14:50-15:10

Session 4

Chair Makoto M. Watanabe / Shunsuke Mawatari

15:10-15:30 Ebbe Nielsen "Global Biodiversity Information Facility"

15:30-15:50 Makoto M. Watanabe "Global Taxonomy Initiative"

15:50-16:10 Shunsuke Mawatari "How to promote Taxonomy?"

16:10-16:40 General discussion on overall sessions

Day 2 January 14th

動物分類学関連学会連合（日本語）

シンポジウム「分類学と現代社会のインターフェイス」10:00~12:00

世話人：片倉晴雄，馬渡峻輔（北大・院理・生物科学）

講演：

- 1) 分類の技能検定：(財)自然環境研究センター 久保田正秀
- 2) 月井 雄二 Protist Database
- 3) 環境アセスメントと分類学：(株)日本海洋生物研究所 金子友美
- 4) 科研費細目「生物多様性」への対応：(社)日本動物学会会長 星元紀

午後13:30より日本動物分類学関連学会連合総会を開催

(鶴崎展巨)



同好会情報

日本には日本蜘蛛学会だけでなく、各地に同好会がある。ここでは、そこで行なわれる採集会や講演会、そこで発行される定期刊行物などの活動内容を紹介する。興味を持たれた方はぜひ入会して、行事などに参加されてはいかがでしょうか。

関西クモ研究会（会長：山野忠清）

会報「くものいと」を年2~3回発行。採集会・研究会例会などを年数回実施。

例会は、2000年12月10日（日）に大阪市の四天王寺高校で実施予定。

くものいと 28号（2000.7.31発行）

特集 クモを採る

クモの採集テクニック

加村隆英：地表で生活するクモの採集の仕方

西川喜朗：徘徊性のクモを採る

田中穂積：徘徊性（コモリグモ類）の場合

須賀瑛文：トタテグモ類の住居を探す秘訣

加村隆英：ピーティングによる採集

吉田 真：ピーティングによる採集

新海 明：渓流の魔術師 ナルコグモを探そう
標本保存のテクニック

谷川明男：クモの標本の作り方と管理方法

西川喜朗：ラベルの書き方

吉田 真・谷川明男：同定依頼のマナーについて

新海 明：シンカイ風「野帳のいため方」

小野展嗣：クモ類の標本管理の現状と問題点
フィールド紹介

寺田孝重：茶園のクモ達 [奈良県矢田原町]
同定指南

田中穂積：コモリグモ科 Lycosidae (その1)
海外の研究トレンド(2)

榎元敏也：飼育環境とクモの行動
クモリスト

船曳和代：姫路書写山のクモ

船曳和代：姫路青山のクモ

須賀瑛文・矢崎充彦：兵庫県飾磨郡夢前町河原
川のクモ

関西クモ研究会採集会報告

清水裕行・船曳和代：姫路市青山採集会報告

蜘蛛エッセイ 第2回

八幡明彦：蜘蛛好き変人とその仲間たち - クモ
もの飼育編 -

寄稿

徳本 洋：イソコモリグモ調査のための砂浜地
形学

会員ニュース

吉田 真：加治木紀行

入会申し込み

〒567-8502 茨木市西安威 2-1-15

追手門学院大学生物学研究室内

関西クモ研究会

Tel 0726-41-9555 (西川研)

0726-41-9550 (加村研)

Fax 0726-43-9432 (大学教務課)

会費 年 1000 円

中部蜘蛛懇談会 (代表: 緒方清人)

会報「蜘蛛」を年 1 回, 「まどい」を年 3 回発行.
採集会・例会を年数回実施.

総会・研究会は, 2001 年 2 月 11 日(日)に
予定.

蜘蛛 (KUMO) 32 / 33 号 (2000.6.30 発行)

特集: 中部蜘蛛懇談会結成 30 周年

結成 30 周年を迎えてのごあいさつ (緒方清人)

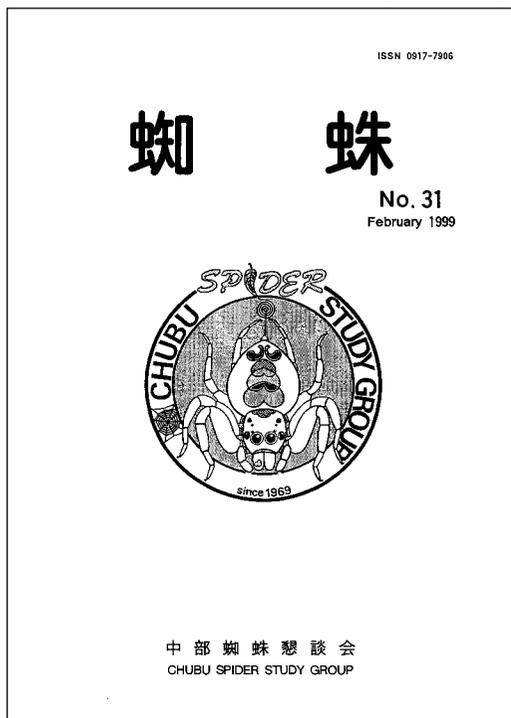


写真: 中部蜘蛛懇談会の今昔

「結成 30 年を迎えて」(須賀瑛文・村上 勝・
益田和昌・吉田 真)

福島彬人: 秋田港で「マダラヒメグモ」採集

宮下和喜: クサグモとコクサグモの生活史の比較

益田和昌: 岐阜県美山町の倍足類 ()

益田和昌: 愛知県瀬戸市の倍足類

益田和昌: 愛知県豊橋市の倍足類

益田和昌: 愛知県知多半島の倍足類

益田和昌: 東海地方のホラヒメグモ

村井健二: 我が家の客人, 居候

板倉泰弘: スジアカハシリグモの求愛行動

板倉泰弘: キシダグモ類の求愛行動に関する論文・短報等のまとめ

緒方清人: 富山村の真正クモ類 ()

石井幸子: ゲホウグモの観察

徳本 洋: 長崎県対馬および福岡県のジョロウグモの垂直分布

短報

須賀瑛文: 愛知県瀬戸市でカトウツケオグモ確認

須賀瑛文: 愛知県知多郡武豊町壱町田湿原で採集されたゲホウグモ

益田和昌: 三重県紀伊長島町のヤスデ

益田和昌: 岐阜県可児郡御嵩町のヤスデ

益田和昌: 愛知県犬山城のヤスデ

益田和昌: ミカワババヤスデの新産地

入会申し込み

〒444-0076 岡崎市井田町字荒居 47-6

板倉泰弘 (事務局)

Tel 0564-28-5857

E-mail: yasuhi@heatful.or.jp

会費

正会員 年 2500 円 (高校生以下, 1000 円)
準会員 「まどい」のみ 500 円

三重クモ談話会 (本部: 太田定浩)
会報「しのびぐも」を年 1 回発行. 採集会・
合宿・例会などを年数回実施.

今年度の採集観察会は, 2000 年 12 月 3 日
(日) 安芸郡河芸町で実施. 近鉄白子駅西口
前. 午前 10 時集合. 大雨以外は決行. 参加希
望者は事務局まで連絡のこと.

総会兼学習会, 懇親会は, 2001 年 2 月 24 日
(土) ~ 25 日 (日) に予定.

しのびぐも 27 号 (1999.12.31 発行)
内容は, 遊絲 6 号を参照のこと.

入会申し込み
〒515-0044 三重県松阪市久保町 1843-157
貝發憲治 (事務局)
Tel(Fax) 0598-29-6427
会 費 年 1500 円

和歌山クモの会 (会長: 米田 宏)
会報「和歌山クモの会会報」を年 1 回発行.
総会・観察会を年 1 回開催.

和歌山クモの会会報 No. 10 (2000.9.30 発
行)
東條 清: 『和歌山クモの会』結成 10 周年を迎
えて
米田 宏: クモに関する迷信や伝説 (7)
山元 晃: クモと名のつく植物と忘れえぬ日
東條 清: セアカゴケグモのその後について

東條 清: 1999 年度 (平成 11 年度) 和歌山ク
モの会総会と観察会報告
入会申し込み

〒642-0002 海南市日方 1156

東條 清 (事務局)
会 費 年 500 円

東京蜘蛛談話会 (会長: 萱嶋 泉)
会報「KISHIDAIA」を年 2 回, 「談話会通信」
を年 3 回発行. 採集会年 4 回・合宿年 1 回・総
会例会などを年 2 回実施.

今年度の採集会は, 2001 年 2 月 18 日 (日)
東京都町田市小山田緑地周辺 集合 午前 10
時 10 分 小田急町田駅バスセンター 12 番
乗り場

合同例会は 2000 年 12 月 10 日 (日). 相模
原市立産業会館 大研修室 A 午前 10 時より.

KISHIDAIA79号(2000.8.31発行)

宮下和喜: イツツグモの生活史

高橋 登: 日本のクモ学と御雇外国人

新海 明・平松毅久: 西表島クモ観察記(1)

池田博明: ハエトリグモの学名の解説(1)

池田博明・新海 明・鶴崎展巨・徳本 洋・西

原かよ子・藤沢備助・榎元敏也・宮下 直:

ジョロウグモの垂直分布調査

池田博明・山北高等学校自然科学部: ジョロウ

グモの垂直分布とその要因を探る

田中穂積: コモリグモ科標本のデータの追加(リ

スト)の訂正

甲野 涼・初芝伸吾: 飼育下におけるムツトゲ

イセキグモが捕食したガ類について

DRAGLINES

榎元ともこ・榎元敏也: アリグモ in セミの抜け

殻

池田博明: ゴミグモ雄の求愛行動を観察

谷川明男: 眼を白黒させるヨリメハエトリ

谷川明男: チュウガタシロカネはオナガが危な

いやつだということを知っている

谷川明男: 芋虫の巣にいたヤリグモの一種

中島晴子: ネコハエトリ雌の共食い

貞元己良: 我が家の庭にも「ゲホウグモ」がいた

泉 宏子: 最終脱皮で雌型から雄型に変わった

クモ2例

初芝伸吾: 2000年を迎えたオニグモ

初芝伸吾・甲野 涼: アオオニグモの年越し

伴 満: マツモトハエトリが蟻の群れの中に

居た

<目録ドラッグラインズ>

新海 明: 京都府向日市善峰寺のクモ

新海 明・大川秀治: 東京蜘蛛談話会 1999年

度観察採集会報告 山梨県大月市扇山周辺の

クモ

入会申し込み

〒229-0038 相模原市星が丘 1-5-5

今井正巳(事務局)

Tel 042-755-3086

会費 年3800円(学生2000円)

関西クモゼミ

1~2カ月に1回,滋賀県草津市の立命館大学
で開催.

会費などなく誰でも参加できる.

連絡先

立命館大学理工学部生物工学科 吉田 真

Tel 077-561-2660

E-mail:myoshida@se.ritsume.ac.jp

東京クモゼミ

毎月1回,第1日曜日に千葉県市川市の加藤
宅で開催.

会費などなく誰でも参加できる.

東京クモゼミ報告(プリント)を配布.

連絡先 新海 明 Tel 042-522-2605

(新海 明)



ゼミ ハエトリグモの 論文再読

ペッカム夫妻のハエトリグモの
性的二型と求愛行動

池田博明

ハエトリグモの求愛誇示行動の研究は,クレ
イン(Crane)女史(1949年)が最初というわ
けではない.古くは,性淘汰(雌雄選択)を提
唱したダーウィンの『人類の由来』の第二版
(1874年)には,カネストリーニのハエトリ

グモの求愛誇示行動の観察例が紹介されている（初版 1871 年にはこの記述はない）。また、1928 年に『クモの生物学』を出版したセイヴァリー（Savory）は、「ハエトリグモの求愛」（第 10 章の一部）の項で、さらに 40 年前のペッカム（Peckham）夫妻の観察を“辛抱強く、熱心な研究”として取り上げている。

ペッカム夫妻はハエトリグモの分類学で成果をあげていたが、それだけではなく、1889 年と 1890 年に「ハエトリグモ科のクモの性的二型の観察」という論文をまとめて、形態に限らず、行動特性も報じていたのである。この 1889 年の論文（全 58 頁）を再読してみた。

この論文で夫妻は、クモの事例に入る前に「序言 Introduction」として、ウォレスの『動物の色彩』や G. アレンの『色彩の意味』を取り上げて、一般論を展開していた。無論、ダーウィンの性淘汰にも言及している。ウォレスはハチドリやハトで典型的に見られるように、雌の地味な色彩は保護色としての自然選択の結果であり、雄の派手な色彩は生命力の強さの表現であると考察していた。しかし、ペッカム夫妻は「脱皮習性」や「二型の例の分類」、「第二性徴」を論じて、ウォレスの性的二型に関する仮説をクモに関しては当てはまらないと指摘していた。

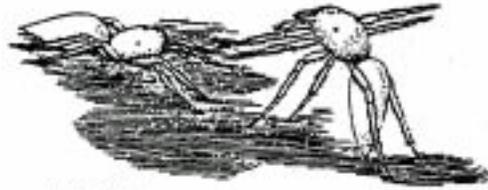
クモでは必ずしも雄が派手なわけではない。造網性の待ち伏せ型の種、オニグモ、ドヨウグモ、アシナガグモ、ヒメグモ、サラグモ等などの雌の派手な色彩は天敵に対して非食用という警告色として発達したのだろう、反対に徘徊性で活動的なコモリグモや活発な餌捕獲をするクサグモの雌の色彩は地味である。成体と幼体の色彩にも様々な変異があった。たとえば、成体雄が派手な場合には幼体は地味な成体雌に似るが、成体雌が派手な場合には幼体は地味な成体雄に似る等々。

夫妻は、ようやく 34 頁目からハエトリグモの「交尾習性 mating habits」について記述していた。1888 年に、夫妻は上面をガラスにした交尾観察用の箱を大小たくさん作製して、研究に臨んだ。一種につき観察は数時間もかかる場合があったが、精力的に次の 15 種で求愛誇示行動や威嚇誇示行動の観察を行なった。*Saitis pulex*, *Epiblemum scenicum*, *Icius* sp., *Hasarius hoyi*, *Synageles picata*, *Marptusa familiaris*, *Phidippus rufus*, *Phidippus morsitans*, *Dendryphantas capitatus*, *Dendryphantas elegans*, *Zygoballus bettini*, *Habrocestum splendens*, *Icius mitratus*, *Philaeus militaris*, *Astia vittata*。

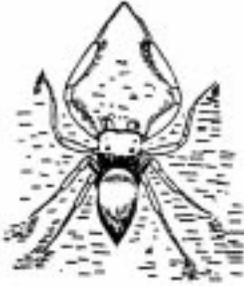
種ごとの記述は意外に淡々としていて、それぞれの種の特徴はあまり強調されてはいなかった。夫妻が“私達の芸術家 our artist”と称するルードヴィヒ・クムリエン氏 Mr. Ludwig Kumlien の描いた 15 枚の図が雄弁であった。求愛の際に、雌に対して雄は第一脚を上方に振り上げる姿が 5 枚、第一脚を前方に向ける姿が 3 枚描かれていた。他の種と異なる求愛姿勢が見られたのは、まず *Marptusa familiaris* で、第一脚と二脚を側方に伸ばして少し後ずさりする例（原図 17 の例）。*Icius mitratus* では第一脚は頭胸部と直角に伸ばされた（原図 23 の例）。また、*Astia vittata* では、雄に淡色型 *vittata* form（雌に似ている）と黒色型 *niger* form の二型があって、雌の周囲を第一脚の片方を上げて走り回った後、上体を低めて雌に接近する淡色型（原図 26）に対して、第一脚を高く上げたまま接近する黒色型（原図 27）と、求愛行動も異なっていた（この種の現在の所属は *Maevia* 属である）。しかし、夫妻は“近縁種であっても色彩・形態・習性が大きく異なるものなので、変異型の間でこのような差異が発見されたから



原図16



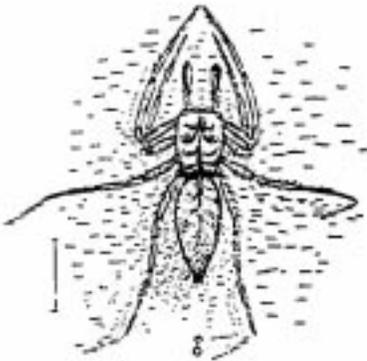
原図17



原図15



原図23



原図26



原図27

とって驚くべきことではない”と書いていた。そして、オニグモの振動による求愛の観察例を付記した後、「要約と結論」をまとめている。

“ウォレスの仮説では雄は常に雌よりも活動的であるはずなのだが、クモには当てはまらなかった。また、雄の生命力が雌よりも大きいという証拠は無かった。色彩の発達と生命力の関係があるとも言えなかった。求愛時には、派手な雄の装飾だけではなく、雄の態度や仕草も実質的に誇示となることが分かったし、雄は雌の

存在下でより闘争的で、交尾時期が終わると闘争傾向を失ったことに、私達は注目した。

これらの事実から私達はウォレス氏の「性淘汰理論に対する二つの強い異論」を検討する気持ちになった。”

ここで、ペッカム夫妻の意見を記す前に、ウォレスの『熱帯の自然』(1878)の訳書に寄せられた新妻昭夫氏の解説を読んでおいた方がよいだろう。

新妻氏は次のように書いていた。“ウォレス

はダーウィンの理論のうち、「雄の派手な色彩や装飾は、雌が美しい雄を選ぶことによって進化してきた」という部分を絶対に認めることができなかつたのである。ウォレスは対案として、雄が派手になつたのではなく、雌が地味になつた（保護色）ことを証明し、生命力の旺盛な個体（雄）ほど色彩が鮮やかになるとする色彩発達の原理を提出した。これらは少し広い意味で自然淘汰に含まれてしまい、性淘汰は無用というわけである。”

ベッカム夫妻は最終的に次のように書いていた。

“ウォレス氏が『熱帯の自然』で書いた第一の異論は、「雌が雄の誇示を賞賛または注視するという証拠がまるっきり欠けている。チョウにおいては、雌が色彩によって影響されるとか、また雌が選択権を行使しているという証拠は微塵もない。むしろその反対の証拠がたくさん並べられている」ということである。しかし、チョウや鳥では、そのす早い飛行のため、一方の性が他方をよく見ることが困難である。しかし、ハエトリグモでは、雌が雄の求愛ダンスにじっくり注意を払うこと、雌はその好意によって求婚者を選択する力と意志を持つことの、決定的な証拠を私達は得た。

第二に、ウォレス氏は次のように言う。雄の鳥がすべてつがいの相手を発見するという事実は「色彩や装飾器官についての性淘汰の効果をほとんど無効にしてしまう；したがって、さほど色彩的でない鳥でも健康な子孫を残すことに関連してなんら不利益がない」。しかし、クモでは雌が次第に成熟するので、雌は数日早く成熟したたくさんの雄の中から選択する。二、三週間続く繁殖期の間、雄は機会を得てペアを作り、より色彩あざやかな雄が選択を繰り返されるようだ。”

ここで、当時の事情を考慮しておかなければ、ウォレスやベッカム夫妻に公平とは言えないだろう。ウォレスは「雄がとくに美しい羽毛とその色彩を誇示するという著名な事実は、まだ説明されていない」と書いていた（『熱帯の自然』訳書 p205）。雄が喧嘩をしているとき、雌は傍らで餌を食べているという記述もあった。つまり、ウォレスが注目していた鳥やチョウでは、雌の眼前で雄が求愛誇示行動をする実例がほとんど観察されていなかったのである。

論文の最後で、ベッカム夫妻は、ハエトリグモでは、雌が注視して行われる雄の発達したダンスや雄同士の闘いといった雄間の競争と、雌の選択が働いて、雌雄の色彩や装飾の大きな違いが生じたと、結論づけていた。

参考文献

Peckham, G.W. and E.G. Peckham, 1889. Observations on Sexual Selection in Spiders of the Family Attidae. Natural History of Wisconsin, 1:3-60.

ウォレス, 1878. 『熱帯の自然』. 平河出版社. (1987年. 谷田専治・新妻昭夫訳)

言いたい!聞きたい!



写真日本クモ類大図鑑の和名学名補足

池田博明・谷川明男

千国安之輔著写真日本クモ類大図鑑を同定に活用している方はたいへん多いと思われる。しかし発行以来 11 年が経ち、この本で使われている学名や和名にはその後の研究によって変更されたものが多くなってきた。そこでこの本を

さらに有効に活用し続けるために、筆者らが気がついた範囲内で変更すべき点をまとめた。

なお、図版ページのみについて取り扱い、解説のページについては触れていない。

p.18 1.キムラグモ キムラグモ種群
Heptathela spp.

p.21 2.ヤマトガケジグモの学名と科
Nurscia albofasciata Strand 1907 ヤマトガケジグモ科 Titanoecidae

p.21 4.クロガケジグモの学名と科 *Badumna insignis* (L.Koch 1872) ウシオグモ科 Desidae

p.23 1.ウズグモ, 2.トウキョウウズグモ, 3.カタハリウズグモ, 5.エゾウズグモの学名の属の部分 *Octonoba*

p.23 4.ミナミウズグモの学名 *Zosis geniculatus* (Olivier 1789)

p.31 9.ヤマトカブトヒメグモの和名学名 ヤマトミジグモ *Dipoena japonica* (Yoshida 1985)

p.34 22.アカイソウロウグモの和名学名 ミ

ナミノアカイソウロウグモ *Argyroides flavescens* O. Pickard-Cambridge 1880

p.34 23.チリイソウロウグモの学名
Argyroides kumadai Chida & Tanikawa 1999

p.34 25.イソウロウグモの一種 ツノナガイソウロウグモ *Argyroides nipponicus* Kumada 1990

p.35 29.クロマルイソウロウグモの学名の属の部分 *Argyroides*

p.37 34.アカミジグモの和名と学名 アカササヒメグモ *Thymoites chikunii* Yoshida 1988

p.37 35.クロミジグモの和名と学名 クロササヒメグモ *Thymoites okumae* Yoshida 1988

p.38 43.ハラナガヒシガタグモの学名の属の部分 *Moneta*

p.38 44.カタハリヒシガタグモの一種 トガリクサチヒメグモ *Coscinida japonica* Yoshida 1994

p.43 62.キヨヒメグモの学名 *Achaearanea oculiprominentis* (S. Saito 1939)

p.45 2.チビホラヒメグモ, 3.コホラヒメグモの学名の属の部分 *Nesticella*

p.67 16.コゲチャオニグモの学名の属の部分 *Neoscona*

p.68 21.トガリオニグモの学名の属の部分 *Eriovixia*

p.69 25.ムツボシオニグモの学名 *Araniella yaginumai* Tanikawa 1995

p.69 26.ムツボシオニグモの一種 トガリハナオニグモ *Araniella displicata* (Hentz 1847)

p.74 36.カラフトオニグモ, 37.サガオニグモ,
p.75 38.キンカタハリオニグモの学名の属



の部分 *Eriophora*

- p.84 68. シマゴミグモの学名 *Cyclosa omonaga* Tanikawa 1992
- p.86 76. カラスゴミグモ カギツメカラスゴミグモ *Cyclosa hamulata* Tanikawa 1992
- p.87 80. コガネグモダマシの一種 ムネグロコガネグモダマシ *Larinia onoi* Tanikawa 1989
- p.88 82. タニマノドヨウグモ チクニドヨウグモ *Metleucauge chikunii* Tanikawa 1992
- p.88 83. キタドヨウグモの学名 *Metleucauge yaginumai* Tanikawa 1992
- p.88 84. サンロウドヨウグモの学名 *Meta japonica* Tanikawa 1993
- p.90 2. ヨツボシアシナガグモ ヨツボシヒメアシナガグモ
- p.96 1. ヒラタグモの科 チリグモ科
- p.97 1. ホウシグモの学名 *Mallinella hoosi* (Kishida 1935)
- p.100 - 103 ヤチグモ属の科 ガケジグモ科
- p.104 ナミハグモ属の科 ナミハグモ科 Cybaeidae
- p.116 35. リュウキュウコモリグモの学名の属の部分 *Wadicosa*
- p.118 3. ヒトオビトンビグモの学名 *Hitobia yasunosukei* Kamura 1992
- p.118 4. ホシジロトンビグモの学名の属の部分 *Sergiolus*
- p.120 10. マエトビケムリグモの和名と学名 マエトビトンビグモ *Sernokorba pallidipatellis* (Bos. & Str. 1906)
- p.120 11. タイリクケムリグモの学名の属の部分 *Trachyzelotes*
- p.120 12. カバキケムリグモの学名の属の部分 *Urozelotes*
- p.120 14. エビチャヨリメケムリグモの学名

の属の部分 *Drassyllus*

- p.121 15. チクニヨリメケムリグモの学名の属の部分 *Drassyllus*
- p.127 25. ウラシマグモの一種 キレオビウラシマグモ *Phrurolithus coreanus* Paik 1991
- p.127 ウラシマグモ属の科 ウエムラグモ科 Liocranidae
- p.128 26. イタチグモ, 27. オトヒメグモの科 ウエムラグモ科 Liocranidae
- p.128 28. ネコグモ, 29. オビジガパチグモの科 ネコグモ科 Corinnidae
- p.128 29. オビジガパチグモの学名 *Castianeira shaxianensis* Gong 1983
- p.153 30. マミジロハエトリの一種(A) マミクロハエトリ *Evarcha fasciata* Seo 1992
- p.153 31. マミジロハエトリの一種(B) シッチハエトリ *Evarcha arcuata* (Clerck 1757)
- p.153 32. マミジロハエトリの一種(D) フィッシャーハエトリ *Evarcha flavocincta* (C. Koch 1848)
- p.157 51. ハエトリグモの一種 タニカワヨリメハエトリ *Asemonea tanikawai* Ikeda 1996
- p.158 55. 雄触肢の写真はジャバラハエトリのものである.
- p.158 56. ジャバラハエトリの一種 チクニハエトリ *Pseudicius chikunii* Logunov & Marusik 1999



埼玉県滑川町におけるスズミグモ 「個体群」

宮下 直

滑川町と言われてもどこにあるのか見当がつかないと思うが、武蔵丘陵森林公園と聞けば多くの関東人が場所を想像できるようだ。この地域には数百の農業用ため池が点在しており、以前はミヤコタナゴも生息していた。私が面倒を見ている大学院生 2 人がこのため池を舞台に数年前から生物群集の調査をしている。そのため、私も年に数回は滑川町を訪れている。ここには典型的な里山地域が広がっていて、多種多様な生物が見られる。クモではトリノフンダミンが豊産し、埼玉県では記録の少ないコガネグモもさほど珍しくない。オノゴミグモも数年前に見たことがある。しかし、この夏にスズミグモが多数生息しているのを発見したときは本当に驚いた。

最初に見つけたのは 8 月 3 日で、このときは主のいない網だけだった。ところが、8 月 5 日に森林公園内でメス 10 匹、オス 1 匹の生息を確認できた。ため池調査の片手間で短時間見回っただけ、にもかかわらずである。分布北限に個体群といってもよいほど多数の個体が生息していたのだ。メスの体長は 15-20mm 程度で(おそらく亜成体と一部成体?), オスは亜成体だった。

その後、9 月上旬に滑川町より北に位置する小川町や寄居町周辺を一部見て回ったが、残念

ながら発見できなかった。でも、生息未確認という情報も重要である。私はこの夏、千葉県南部の天津小湊町や鴨川市周辺を何度も歩き回ったが、スズミグモは全く発見していない。ここは滑川町よりずっと温暖なのに未確認地域である。房総はやはり陸の孤島なのかも知れない。

最近、クモに限らずさまざまな生物の分布北上が報じられている。私が好きなナガサキアゲハもついに三浦半島で採集されたい。故郷の長野県飯田市でも、南方系のツマグロヒョウモンが定着したようで今では普通に見られる。子供の頃には想像もできなかったことである。でも、分布北上が地球温暖化によると言っ

てよいだろうか? 今のところ、可能性は少ないが、少し慎重な分析が必要のように思う。分布の南下が報告されている生物もいるからである。オオモンシロチョウやカラフトセセリという大陸由来の外来種が北海道から東北に侵入しているらしい。もし仮に、北



スズミグモ

上している種と南下している種の数が五分に近いのであれば、スズミグモの北上は温暖化とは無関係の分布拡大の可能性が高い。一方、両者の割合が北上の側に偏っているのであれば、温暖化の可能性を強く示唆できると思う。もちろん、「温暖化の可能性を示せたから何なの?」というクールな問に対する答えも用意しておいた方がよいだろう。

採集情報

日本各地で採集された、稀産種や分布上の重要種などについての情報を掲載する。これを読み、「私もこんな種類を採集しているぞ」という方はその情報を是非お寄せいただきたい。

ツシマトリノフンダマシ

神奈川県小田原市入生田吾性沢 2000年6月21日 成体1 勝山輝男・出川洋介



ツシマトリノフンダマシ

サカグチトリノフンダマシ

熊本県宇土市長浜町 2000年7月15日
成体1 大塚 勲

ムツトゲイセキグモ

東京都あきる野市広徳寺 2000年7月11日 幼体2 新海 明

京都府京都市大原 2000年7月21日
成体1 吉田 真

神奈川県秦野市渋沢 2000年8月14日
成体1 卵のう2 日置乃武子

神奈川県津久井町仙洞寺山 2000年8月5日 成体1 新井浩司

シロゴミグモ

神奈川県城山町 2000年9月9日 成体1 大川秀治

マメイタイセキグモ

神奈川県横須賀市三崎小網代 2000年9月12日 成体1 八幡明彦

キジロオヒキグモ

静岡県榛原郡中川根 2000年7月23日
成体1 新海 明

スズミグモ

東京都町田市小山田緑地 2000年7月2日 幼体多数 貞元己良・秋元 登

東京都八王子市創価大学周辺 2000年7月9日 亜成体2, 成体1, 亜成体1 新海栄一

神奈川県横浜市栄区横浜自然観察の森 2000年7月9日 幼体1 松田久司

埼玉県比企郡滑川町森林公園 2000年8月5日 成体10, 成体1 宮下 直

神奈川県津久井町仙洞寺山 2000年8月5日 1 新井浩司

佐賀県杵島郡大町町(浦田自然公園) 2000年8月24日 成体1 山下 功

クロマルイソウロウグモ

東京都町田市小山田緑地 2000年7月2日 成体1 卵のう 新海 明 2000年10月15日 幼体3 新海 明

佐賀県東松浦郡相知町 2000年9月18日
成体1 山下 功

コケオニグモ

千葉県君津市東京大学千葉演習林札郷作業所 2000年5月24日 幼体1 宮下 直

千葉県安房郡天津小湊町東京大学千葉演習林清澄宿泊所 2000年6月4日 幼体1 宮下 直



コケオニグモ

愛知県北設楽郡設楽町 2000年8月15日

成体2 緒方清人

愛知県北設楽郡設楽町 2000年8月16日

成体1 緒方清人

シロスジグモ

神奈川県鎌倉市七里ガ浜 2000年10月2日

成体1, 幼体1 谷川明男

(新海 明・池田博明・谷川明男)



最近気がついた分類関係の文献

最近発表された日本のクモの分類に関連のある論文をいくつか簡単に紹介する。

：松田まゆみ 2000 . アメイロハエトリ属の日本新記録 . 上土幌町ひがし大雪博物館研究報告 , 22:29-30. *Synagelides zhilcovae* Prószyński 1979 キタアメイロハエトリを日本新記録として報告 .

：松田まゆみ 2000 . これまで *Walckenaeria antica* (Wider 1834) に誤同定されてきた *W. golovachi* Eskov et Marusik, 1994 の記載 . 上土幌町ひがし大雪博物館研究報告 , 22:31-34.

チョビヒゲヌカグモを *Walckeaeria golovachi* Eskov & Marusik 1994 に同定しなおした .

：Akio Tanikawa 2000. Japanese spiders of the genus *Eriophora* (Araneae: Araneidae). *Acta Arachnologica*, 49:17-28.

Zilla astridae (Strand 1917) サガオニグモ , *Zilla aurea* (S. Saito 1934) キンカタハリオニグモ , *Zilla sachalinensis* (S. Saito 1934) カラフトオニグモを *Eriophora* に転属 . また , サガオニグモの学名を *Eriophora sagana* (Bösenberg & Strand 1906) とし , *Eriophora yanbaruensis* Tanikawa 2000 ヤンバルオニグモを新種として記載した .

：Mastuei Shimojana & Moritaka Nishihira 2000. A new cave-dwelling eyeless spider of the genus *Coelotes* (Araneae: Amaurobiidae) from Okinawa Island, the Ryukyu Islands, Japan, with notes on possible parthenogenesis. *Acta Arachnologica*, 49:29-40. *Coelotes troglocaecus* Shimojana & Nishihira 2000 オキナワホラアナヤチグモを新種として記載した .

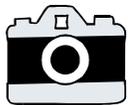
：Peter Jäger & Hirotsugu Ono 2000. Sparassidae of Japan. I. New species of *Olios*, *Heteropoda*, and *Sinopoda*, with notes on some known species (Araneae: Sparassidae: Sparassinae and Heteropodinae). *Acta Arachnologica*, 49:41-60. *Olios japonicus* Jäger & Ono 2000 ニホンミナミアシダカグモ , *Heteropoda simplex* Jäger & Ono 2000 ホソミアシダカグモ , *Sinopoda okinawana* Jäger & Ono 2000 リュウキュウコアシダカグモ , *Sinopoda tanikawai* Jäger & Ono 2000 アマミコアシ

ダカグモを新種として記載した。

：田中穂積 2000 . *Wadicosa* 属のクモ ,
W. okinawensis (Tanaka) 日本に産す. *Acta*
Arachnologica, 49:95-97. *Pardosa*
okinawensis リュウキュウコモリグモを
Wadicosa 属に転属した .

：Hajime Yoshida & Hirotsugu Ono 2000.
Spiders of the genus Dipoenia (Araneae,
Theridiidae) from Japan. *Bull. Natn. Sci.*
Mus., 26:125-158. *Dipoenia okinawana*
Yoshida & Ono 2000 オキナワミジグモ ,
Dipoenia maculosa Yoshida & Ono 2000 マ
ダラミジグモ , *Dipoenia yona* Yoshida &
Ono 2000 ヨナミジグモの 3 新種を記載し ,
Dipoenia martinae Roberts 1983 ホシミジ
グモと *Dipoenia prona* (Menge 1868) アイチ
ミジグモの 2 種を日本新記録として報告した .
また , *Dipoenia longisternum* Bösenberg &
Strand 1906 ムナボソミジグモを *Dipoenia*
mutilata Bösenberg & Strand 1906 コアカク
ロミジグモの新参シノニムとした .

(谷川明男)



ギャラリー



オオジョロウグモの婚姻バール

雌の頭胸部よりも小さな雄が、雌の頭胸部と腹部にかけて細い糸をかけている。いったい何の意味があるのだろうか。

(谷川明男)



遊糸 5,6 号会計報告 (1999.8 ~ 2000.7)

収入

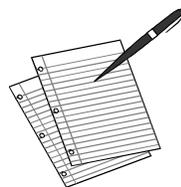
寄付	76120 円
学会補助	2620 円
繰越金	3699 円

合計 82439 円

支出

遊糸 5 号送料	23940 円
遊糸 6 号送料	23580 円
紙 / 封筒 / プリントターナー	29405 円
小計	76925 円
次号繰越金	5514 円

合計 82439 円



原稿募集中

「遊糸」の原稿を募集中です。ちょっとした観察記事(短報), 会員に広く知ってもらいたい情報(総説), 採集記録, 文献紹介, 各地の同好会の催物情報, 研究上の標本や資料募集の記事等など, なんでも構いません。こんなコーナーも作って欲しいという希望があれば, それも OK です。会員の皆様のご協力を是非お願いします。

投稿にあたってのお願い

1. 原稿はクモ形類・多足類に関することならなんでも構いません。

2. 字数制限はありませんが、あまりに長文の場合は削除や分割での掲載をお願いすることもあります。

3. 原稿はワープロ、手書き原稿、はがき、E-mail などなんでも構いません。

原稿送付先

〒190-0022 立川市錦町 3-12-16-1103

新海 明まで

E-mail では dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp (谷川明男) まで

発行は、年 2 回 (5 月, 11 月) の予定。締切は発行月の前月末日です。



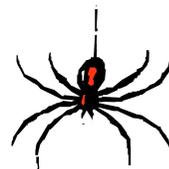
編集後記

今年の日本クモ学会大会に参加して、誰もが気付いたことは若手の研究者が増えたということだろう。いずれも、北大・東大・京大を中心とした大学院生だったが、今後の研究の進展と活躍が楽しみである。学会奨励賞も創設され、受賞研究が相次いであらわれることを期待したい。また、大会会場でも販売されていたが、「クモの生物学 (宮下直編)」が出版された。気鋭の研究者による最先端のクモ学の紹介であり、これを読んだ大学生や院生、さらに農学理学系の研究者がクモの持つ研究対象としての面白さに気付き、新たにクモ研究の道に踏み込んでくれればと願っている。本会は会員数の減少といった悩みをかかえているが、今後これらの研究者が入会すれば、今までとは異なる会員構成が期待され、この問題の解消の一助となるかも知れない。21 世紀という節目を迎えクモ学会が新たな飛躍を遂げようだという実感を強く感じさせられた大会だった。

一方で、本号の同好会情報をみてもわかる通

り、各地のクモ研究者も活気にあふれている。東京クモ談話会誌が 30 周年を迎えたのが昨年だったが、今年では中部蜘蛛懇談会が 30 周年、和歌山クモ研究会が 10 周年を迎えた。関西クモ研究会会誌「くものいと」もリニューアルして元気一杯である。各同好会会誌を読めばその内容が益々多岐に渡り充実してきているのがわかる。そして、これらのプロとアマのほど良い融合の接点に「遊絲」があればと願っている。

(新海 明)



日本蜘蛛学会

入退会は

事務局

305-8604 つくば市観音台 3-1

農業環境技術研究所環境生物部

田中幸一

Tel 0298-38-8313 Fax 0298-38-8307

E-mail: tanaka@nia.affrc.go.jp

会費の問い合わせ及び住所変更は

会計幹事

170-0004 豊島区北大塚 3-12-2

笹岡文雄

Tel 03-3918-1945

年会費 正会員 7000 円 (学生は 5000 円)

郵便振替口座 00970-3-46745

ホームページ

<http://www.asahi-net.or.jp/~hi2h-ikd/asjapan/index.htm>

遊絲 第 7 号

2000 年 11 月 25 日発行

編集者 新海 明, 谷川明男, 池田博明

発行者 日本蜘蛛学会 会長 吉田 真